

幼稚園児の家庭における生活能力の発達研究

高田 昭子

(華頂 短期大学)

I. はじめに

幼児期は心身の発達がきわめて著しく、人間形成の基礎の培われる時期であることは言うまでもない。この時期に望ましい生活経験を身につけることは、社会生活を営む上での必要不可欠なものである。生活習慣の自立にあたっては、すでに家庭生活でさまざまな習慣が身についている。

3歳、あるいは4歳から幼稚園という集団に入り、その中で現わす幼児の姿は、一人ひとりのもつ個性であったり、家庭生活そのものの姿であるともいえよう。

近年、家庭生活が低下し、幼稚園に入園した幼児が基本的な生活習慣を身につけていないとも言われている。文部省の「児童の日常生活に関する調査」においても生活習慣の未形成の実態を明らかにしている。その要因として、家族機能の変化により、幼児の親や兄弟をモデルとして、自分の行動様式を獲得する機会が余りにも少なくなっていること等があげられている。

人間として初めて出会う社会が「家庭」であり「家族」であることから、基盤は、家庭教育に負うところが大きく、幼稚園での指導を考える上で、家庭教育との連続性を抜きにしては考えられないと思われるのである。

II. 研究の目的

本研究では、生活能力の発達について、松原達哉の研究をふまえて分析し、子どもを育てるに際しての、基礎的な分野をとりあげたものである。

生活能力の発達は、家庭での生活や家族の考え方、教育観にも影響されると思われる。幼稚園生活を送る子ども達の、家庭生活での実態を把握することで、日々の指導に役立てると共に、幼稚園、家庭の役割から幼児の生活能力の自立を考えようとするのが目的である。

III. 調査の方法と内容

1. 調査の対象

本学付属幼稚園3歳、4歳、5歳の幼児159名
(3歳児55名、4歳児55名、5歳児49名)

2. 調査の時期

1996年9月

3. 調査の手続き

アンケートによる質問紙法。主に母親に記入してもらった。

4. 調査の内容

家庭生活場面における生活能力に関する質問、年齢別・同胞数・出生順位・家族数・母の職業の有無・

祖母の同居の有無等の基本事項である。

生活能力の発達項目は次の通りである。

排泄・着脱衣・清潔・食事・身体移動・作業能力・我慢強さ・礼儀の9領域とし、各領域別に項目合計100を設け、各項目ごとに「A・できる」「B・ほぼできる」「C・できない」の選択肢の中から該当するものを一つ〇でかこむ回答形式である。

被調査の属性別人数は図1-1に示す通りである。

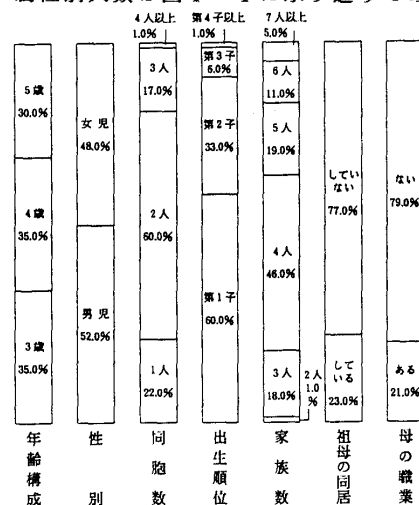


図1-1 被調査の属性別人数

IV. 結果と考察

1. 睡眠

3歳で「おやすみなさいと挨拶をして寝る」が98.1%と高い発達を示し、次に「大体決まった時間に寝る」の96.4%である。また、出来ていない項目については、「夜中に一人でトイレに行く」の74.5%で、次に「自分の寝床の始末をする」であった。

4歳では、3歳と同様に「おやすみなさいと挨拶をして寝る」が98.2%の幼児に出来ており、次に「一人でパジャマに着替えて寝る」である。できない項目では、これも3歳と同じく、「夜中に一人でトイレに行く」の、58.1%であった。

5歳になると、「寝る前に一人でトイレに行く」「おやすみなさいと挨拶をして寝る」「一人でパジャマに着替えて寝る」の3項目がほぼ全員の幼児に発達しているといえる。3歳、4歳、5歳児すべての年齢に発達している項目は「おやすみなさいと挨拶をして寝る」であり、これは家庭の養育態度とも深く関係している様に思われる。又、出来ていない項目としては、

「夜中に一人でトイレに行く」「自分の寝床の始末をする」が共に未発達であり発達途上であるといえよう
(表1-1 に示す)

表1-1 睡眠 (単位:人)

質問項目	回答 年齢	A			B			C		
		3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳
1 大体決まった時間に寝る		24	20	23	29	32	23	2	3	3
2 寝る前に一人でトイレに行く		26	36	45	19	13	4	10	6	0
3 「おやすみなさい」と挨拶をして寝る		44	42	42	10	12	7	1	1	0
4 一人で機嫌よく寝る		21	21	21	18	20	18	16	14	10
5 部屋を暗くして寝る		41	40	32	10	10	14	4	5	3
6 夜中に一人でトイレに行く		6	13	25	8	10	12	41	32	12
7 一人でパジャマに着替えて寝る		30	39	47	19	15	2	6	1	0
8 自分の寝床の始末をする		6	8	4	15	25	23	34	22	22
9 朝、きまった時間に目をさます		21	18	13	30	32	29	4	5	7
10 一人で機嫌よく起きる		22	27	22	26	24	23	7	4	4

2. 排泄

排泄の習慣では、3歳、4歳、5歳児ともに出来3項目中、「一人で小便が出来る」「おねしょはほとんどしない」が高い発達を示している。(表1-2 に示す通りである)特に4歳、5歳児では「一人で小便が出来る」項目は100%で全員に発達していることがわかる。未発達については、「朝、決まった時間に大便をする」がどの年齢においても約7割近い幼児に出来ていない高い傾向を示している。これは、起床時間、朝食時間等にも大いに関連し、朝の余裕のない生活が大きく影響しているものと考えられる。

表1-2 排泄 (単位:人)

質問項目	回答 年齢	A			B			C		
		3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳
11 一人で小便ができる		42	51	49	11	4	0	2	0	0
12 一人で大便ができる		31	38	47	19	15	1	5	2	1
13 朝、決まった時間に大便をする		0	4	2	14	15	12	41	36	35
14 大便の時、紙を使って後始末ができる		16	22	38	13	22	7	26	11	4
15 パンツを汚さない		25	35	36	27	20	12	3	0	1
16 夜おむつをしている		50	53	48	1	1	0	4	1	1
17 おねしょはほとんどしない		43	44	42	10	10	6	2	1	1
18 夜中に小便をあらかじめ知らせる		29	44	42	13	4	4	13	7	3

3. 着脱衣

着脱衣の習慣では、3歳児で「衣服を一人で着ようとする」が98.2% 出来ており、4歳児では「上着が一人で脱げる」「上着のボタンがかけられる」がほぼ全員に発達を示している。5歳児においては、4歳児と同じ項目に「衣服を一人で着ようとする」「衣服が一人で着られる」「衣服の両袖を正しく通すことが出来る」「自分で靴下をはける」の6項目が全員に発達しているといえる。これらは、身体的発達とも大いに関連しあっているようである。また、出来ない項目については、どの年齢においても、「ひもを片結びできる」であり、3歳で約82%、4歳で約55%、5歳で約25%と未完成ではあるが、年齢とともに発達していく様子が伺える。(表1-3 に示す)

V. 結論

本研究では、3歳から5歳までの幼稚園児を対象に、家庭における生活能力の発達を明らかにすることを目

表1-3 着脱衣 (単位:人)

質問項目	回答 年齢	A			B			C		
		3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳
19 衣服を一人で着ようとする		38	41	47	16	12	2	1	2	0
20 衣服が一人で着られる		32	36	48	19	18	1	4	1	0
21 上着が一人で脱げる		34	44	47	18	11	2	3	0	0
22 上着のボタンがかけられる		34	40	46	16	15	3	5	0	0
23 衣服の両袖を正しく通すことができる		32	42	46	19	12	3	4	1	0
24 自分で靴下をはける		35	41	48	16	12	1	4	2	0
25 ひもを片結びできる		3	8	18	7	17	14	45	30	17
26 タイツをはける		8	14	30	18	23	17	29	18	2
27 手袋が一人でめられる		11	24	40	25	23	8	19	8	1
28 衣服のほころびを胸に知らせる		28	29	39	19	16	9	8	10	1
29 脱いだものを一定の場所におく		14	12	26	20	24	12	21	19	11
30 衣服をたためる		16	21	25	17	23	22	22	11	2

的として、調査・考察をすすめてきた。その結果は表1-4 と図1-2 に示す通りである。能力全体を年齢別に発達順にみると、3歳では、礼儀、我慢強さ、食事、排泄、睡眠、着脱衣、清潔、身体移動、作業能力となっている。4歳においては礼儀、我慢強さ、排泄、食事、着脱衣、睡眠、清潔、身体移動、作業能力であり、5歳では、着脱衣、礼儀、我慢強さ、排泄、睡眠、食事、清潔、身体移動、作業能力の順である。3歳と4歳ではほぼ同様の傾向がみられ、礼儀と我慢強さが発達の上位を示していることがわかる。

5歳児においては、着脱衣が優れ、次に礼儀、我慢強さと続いている。昨今、我慢する経験が非常に少なく、礼儀が乱れている。挨拶もまともにできない等の意見があちこちで聞かれているにもかかわらず、高い発達順位には意外であった。これは、調査時期が9月であったこともあり、すでに幼稚園生活において、集団生活を送るための決まりや、ルールのある行動をとれる様になっているため、家庭においても身についているものとも考えられる。次に、食事、排泄、睡眠、着脱衣であるが、年齢によって領域の発達差は上下しているものの、やはり年齢とともに発達しているといえよう。これらは、家庭のしつけが大きく影響を及ぼしているものと思われる。よいしつけは、命令するからやるのではなく、幼児自身が必要性を感じ、やろうとする意欲をもつように認め、励まししながら自分自身で身につけようとする態度を育成していくことであるといえよう。

次に、清潔、身体移動、作業能力がすべての年齢において7,8,9番の順位であるが、4歳から5歳にかけて急速に発達を示している。これは手足の発達と共に年齢による経験の積み重ねとも深く関連しているであろう。3歳では身体移動、作業能力が特に劣っているといえる。

以上のことから、「生活能力の発達は、年齢と共に発達する」という従来の研究を裏付ける結果となった